

「運動嫌い」・「体育嫌い」について
～教師と生徒の相互認識差に着目して～

加賀 はづき 石川 旦

キーワード：身体運動 生涯スポーツ 体育授業

On the students' dislikes of exercise and physical education:
Differences in their cognitions between teachers and students in junior high schools

Hazuki Kaga Noboru Ishikawa

Abstract

Since more than 20 years, problems of students' disliking of exercise and physical education have continuously been the concerns in physical education. In order for the lifelong physical activities to be effectively promoted, physical education (p. e.) teachers at all levels of schools should endeavor to have their students be physically active after their school years. The intention of this study was to examine mutual cognitions of students' dislikes of exercise and physical education among teachers and students in junior high schools.

Questionnaires were mailed to 62 chair p. e. teachers at all public junior high schools in S city in M prefecture and 31 responded (50%), in which males were 20, females 11. Also, questionnaires using Likert scales were administered to 269 students (7th:142, 9th:126;and boys:45%, girls:55%) at arbitrarily selected schools by p. e. teachers at their respective schools.

The numbers of disliking students estimated by the teachers were about 5 for exercise and 3 for physical education in a class of 40 students; however, corresponding numbers of students were found to be opposite. Teachers seemed to judge disliking students as not active in exercise and as being an intended observant in classes. Teachers estimated the reasons of those disliking students as for personal ones as personality (fear of mistakes), health and fitness (obesity), skill (unskillful), valuing (painful), past experience (uncomfortable, injuries), and for physical education class as emphasis on discipline, difficulty in specific sports, totalitarian instruction, emphasis on fitness and techniques, and methods of grading. Student's reasons listed were not-skillful, reluctant and dislike of exercise, restricted, not interested, and changing clothes in classes. To cope with these reasons, teachers tried to let those students have self-confidence, to give suggestions on skill and fitness learning, to word positive praise and to explain the importance of exercise and physical education. About 30% of students disliked gymnastics, track and field, and swimming; however, 98% and 70% of students were aware of the importance of exercise and physical education class, respectively. These results suggested us that physical educators should endeavor more to satisfy students'needs and reduce the number of disliking students.

Key words: physical activity, lifelong fitness, school physical education,

Ⅰ. はじめに

今日、生涯体育・生涯スポーツなどの言葉を良く耳にする。このことは、生涯を通して運動を適切に実践し、常に健康・体力を維持することによって活動的に生活する必要性を認め、豊かな充実した生活を営むことを期待するからだろう。このようなことを将来において達成するためには、その1つの方法として、学校体育や日常生活において、自ら運動に親しむことができる児童生徒を、われわれ保健体育の教員は育てていく必要があるのではないだろうか。

学校段階において、社会に出たあとも体育・スポーツ活動を継続することができるように、体育・スポーツに対する強い関心と、それを生涯にわたって実践・継続する態度や意欲を身につけることは重要である。³⁾⁵⁾ そのためには学校体育において、運動の楽しさを経験させ、運動に対する興味を持たせることが必要であると考えられる。

体育・スポーツに対する強い関心や意欲は、日常的な身体運動の実践とともに、体育・スポーツは「楽しい」ものであるという実体験を持たせることが重要ではないかと考えられる。³⁾

新学習指導要領では、豊かなスポーツライフを培うことを学校体育の目標のひとつとして掲げている。¹³⁾ しかし、一方では現実の社会において、運動離れや運動不足、体育嫌いということばを聞くことが多い。

学校体育の現場では、運動技能の習得や発揮を中心とした授業が展開されることがしばしばであり、例えばその成績評価においては運動のパフォーマンスによってのみ児童生徒の学習活動の成果を評価することがなされやすい。

このようなことから真面目に学習に参加している運動能力の低位な児童生徒に対しては、低い評価が与えられ、教師の配慮の足りなさが体育嫌いの一つの原因になっていることが感じられる。

幼児期の子どもに関して言えば、運動不足と栄養過剰のために、肥満傾向の子どもが増加している。肥満であることが運動パフォーマンスの低下を招き、周囲から評価されないため、運動嫌いになっているのかもしれない。また、「遊び=運動」というのではなく、ゲームやテレビなど身体運動を伴わない遊びが、今日の子どもの主要な遊びの内容となっている。⁴⁾ そのため、運動をして汗をかくということを不快に感じたりして、活発な身体運動との関わりが薄れてきているようである。

このように、幼児期における運動に関わる経験が減少しているため、「運動離れ」の子どもたちが増え、運動や体育活動をすることに対し、肯定的・積極的態度をもつことができず、「運動嫌い・体育嫌い」の態度や行動となって現れているのではないかと考えられる。

体育授業における児童生徒の学習活動についてみると、

そこで取り組む運動やスポーツは、普段の生活のなかでおこる身体運動や遊びとは異なる。体育の「授業」においては、設定された目的・目標を達成するために、意識的に身体運動に取り組むことが期待され、生徒にとっては、より価値志向的・目的意識的に目標やねらいの達成に向けて方向づけられ、生徒の自由な主体的な行動が制限を受け、基準化された結果や記録の追求への努力が過大に要求されているのではないだろうか。

これからの社会においては、生活習慣として、主体的に自由に運動やスポーツに親しむことの必要性がますます高まると言えよう。このため、そのような方向に動機づける学校における体育の役割は益々高まるものと考えられる。

しかし、いわゆる「体育嫌い」は、20数年前から注目されている。⁶⁾あるいは、戦前・戦中の体育(体操)にもあったかもしれない。その「体育嫌い」の子どもの原因となるものは、単に体育の授業や本人自身に関わることだけではなく、その子どもを取り囲む環境によっても強く規定されてくるのではないかと思われる。

本研究は、このような必要性和状況の中で、中学校において、生徒たちがどのような意識状態にあるかを明らかにし、また、教師がどのように状況を認識し、対応しようとするのかを相互比較的に検討することを目的とした。

Ⅱ. 用語の定義

(1) 運動嫌い

本研究で用いる「運動嫌い」とは、自らスポーツ活動や身体活動を行うことに対して否定的態度を取るものをいう。

(2) 体育嫌い

本研究で用いる「体育嫌い」とは、授業の雰囲気、運動種目、施設用具、授業内容、教師の指導法、評価の仕方など、体育授業の経験の中で発生したものをいう。

Ⅲ. 研究方法

質問紙を郵送し回収する方式で調査を実施した。

(1) 調査対象

- 1) 仙台市内の全公立中学校(62校)の保健体育教諭(主任)62名を対象とした。最終回収数は31名(50.0%)であった。その内訳は、男子20名、女子11名であった。
- 2) 仙台市内の任意に選択した中学校4校の1年生(142名)と3年生(126名)合計268名から回答を得た。その内訳は、男子121名、女子147名であった。

(2) 調査期間と実施要領

平成17年9月末から12月上旬の間で実施した。

- 1) 教諭(主任)を対象とする質問紙調査は、平成17年9月末に、各学校の体育主任宛に郵送法でし、回答数

が少ないため、平成17年10月末に葉書で督促した。

- 2) 生徒対象の調査は、中学校4校に対して、平成17年10月末に各学校の教諭に質問紙を一括して配布し、1年と3年の各学年から各校それぞれ1クラスを抽出して行った。生徒は無記名式で質問紙に回答した。

(3) 調査内容

教師と生徒に対して、それぞれ次のような内容で調査した。

教師に対する設問は以下の通りである。

- 1) 教師を対象とした質問項目
 - ・「運動嫌い」や「体育嫌い」の生徒1クラス当たりの推定人数
 - ・「運動嫌い」や「体育嫌い」の現れ方
 - ・教師が考える「嫌い」についての本人の要因及び授業の要因（波多野によってあげられた要因に基づいて選択肢を作成）
 - ・嫌いな生徒に対する教師の対応（記述式）
 - ・学習カードの適用状況
- 2) 生徒を対象とした質問項目
 - ・「運動の好き・嫌い」や「体育の好き・嫌い」（5段階による回答とその理由の記述）
 - ・体育授業で学習する運動種目の好き・嫌いの程度（5段階で回答し、理由を記述）
 - ・選択制の授業で選択した種目
 - ・選択制の授業の必要性（理由を記述）
 - ・運動の必要性（4段階により回答）
 - ・体育授業の重要性（3段階により回答）

(4) 調査結果の処理

集計要領は以下の通りである。

- 1) 教師について
 - 単純集計による頻度の分布とその割合を求めた。
- 2) 生徒の処理
 - 単純集計により頻度とその割合を求めた。
- 3) 関連項目について
 - 教師と生徒の回答を対比して解釈的に検討した。

IV. 結果と考察

(1) 教師の状況認識と対応

1) 対象の特性

40歳代が45%、30歳代が32%と30代40代が全体の約8割をしめていた。また、全体の65%が男性教師であり、35%が女性教師であった。

対象者の教員経験年数については、11～20年の教員が最も多く36%、21～30年の教員が32%で2つを合わせると全体の3分の2強であった。

2) 運動嫌いと体育嫌いの推定数

①運動嫌い

表1. 運動嫌いの推定数

	0		1～2		3～5		6～9		10～15		16以上		計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
男	0	0	9	29.0	6	19.3	3	9.6	0	0	0	0	18(2)	57.9
女	1	3.2	0	0	6	19.3	4	12.9	0	0	0	0	11	35.4
計	1	3.2	9	29.0	12	38.6	7	22.5	0	0	0	0	31	100

この表により運動嫌いが3～5名だと見ている教師は全体の38.7%であり、1～2名とするものが4分の1強、また、6～9名とするものが5分の1強いた。ここから平均的人数を推定することは困難であるが、平均し5名程度いるとみられていることが分かった。

②体育嫌い

表2. 体育嫌いの推定数

	0		1～2		3～5		6～9		10～15		16以上		計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
男	0	0	13	41.9	4	12.9	1	3.2	0	0	0	0	19(1)	58
女	0	0	3	9.6	5	16.1	3	9.6	1	3.2	0	0	11	38.5
計	0	0	16	51.5	9	29	4	12.8	1	3.2	0	0	31	100

体育嫌いが0名だとみている教員は1人もいなかった。1～2名はいると答えた教員は全体の半数以上であった。また、運動嫌いでは10～15名いると答えた教員はいなかったが、体育嫌いについてはいると答えた教員が少し(3.2%)いた。

上の2表から、運動嫌いよりも体育嫌いの方が少なくみられているように見える(3名)が、この事実をどのように解釈してよいかは明らかではない。

3) 「嫌い」の状況

体育教師が、運動嫌い・体育嫌い両方を一括して、それらがどのような様相として現れているのかについて、選択肢によって回答を得た。

運動嫌いの様相としては、回答の多い方から、運動の仕方が消極的、すぐに疲れたという、理由もなくやりたくないという、適当に運動している、運動の意味や必要性を認めない、であった。

体育嫌いの様相としては、回答の多い方から、(意図して)見学する、(意図して)欠席する、どんな運動もできないという、運動着を忘れてくる、であった。これらの

状況や様相は、教師自身の目からみられたものであり、生徒の理由や反応と照合してみることは意味があるであろう。

4) 運動嫌い・体育嫌いの要因

教師が考える運動嫌い・体育嫌いの要因については、波多野の先行研究により、³⁾ 本人の要因と授業の要因の2つの領域において選択肢を設定し、回答を得た。

① 本人の要因

本人においては、性格的要因では、失敗恐怖、劣等意識などが多くあげられていた。健康的要因としては肥満やひ弱があげられ、肥満に対しては、約60%の教員が原因であるとみていた。健康的要因の2つは、当然予測される要因といっていよう。体力的要因は、持久力不足と筋力不足が共に30%を占めていた。おそらく、これらの理由により、パフォーマンスが劣ることに対して否定的な態度や行動をとることから、そうみられているのであろう。技能的要因では不器用さが54%と全体の半数以上であった。その他の項における自由記述の中には、おそらくこの原因と考えられる「運動経験不足」や「幼少期における運動不足からくる不器用さ」などの回答がみられた。価値的要因では、苦痛、楽しめないがあげられ、これによると、生徒が体を動かすことに対して苦痛を感じているとみている教師が全体の32%で、また、楽しめないとみている教師が全体の29%あった。食わず嫌いとか、興味なしという要因も合わせると25%程度となり、このことは体育授業過程の中で、カリキュラムの構成やその展開において、検討してみる必要のある問題といえるだろう。

表3. 体験的要因

	不快体験		外傷体験		その他		計	
	N	%	N	%	N	%	N	%
男	13	35.2	7	18.9	2	5.4	22	59.4
女	10	27.0	5	13.5	0	0	15	40.5
計	23	62.2	12	32.4	2	5.4	37	100

体験的要因では、運動による不快体験が全体の62%を占めている。この運動による不快体験の設問には、「運動の不出来」「失敗」「物笑い」などの具体的な項目が含まれている。また、運動による外傷体験も1/3程度あり、この設問項目の中には「大けが」「溺れ」「恐怖」などが含まれている。

このようにみえてくると、個人的な本人の要因としては、提示されたすべての側面について原因が指摘され、中でも、具体的には、失敗恐怖、劣等意識、肥満、筋力・持久力不足、不器用、(運動することの)苦痛、不快・外傷

経験などがより多くあげられていた。

② 授業の要因

授業に関わる要因として、各側面(要因)とそれぞれの内容項目を設定し、選択する方法で回答を得た。

授業においては、生徒・教師関係があげられた。ここでは、協調性(35%)や規律性(31%)の強制が、教師の態度(31%)との関連において、生徒の体育嫌いの原因となっているとみられているといえるようである。運動種目の要因では、種目の特性による嫌いや、技能的な困難さが、大きな原因として考えられている。施設用具の条件の要因としては、用具の数の不足(36%)や場所の狭さ(29%)と質の不十分さ(21%)などが指摘されている。この施設の条件が実際に生徒の体育嫌いの発生とどのように関係しているかは、生徒の理由の中にはないので不明である。しかし、現実によくみられる更衣室やシャワー等の準備・整備状況やその利用しにくさ等のことから考えると、このことが教師にとっては、体育嫌いの要因になりうると考えられるのはうなずける。

表4. 学習指導の方法

	一斉指導		個別指導		班別指導		男女共習		その他		計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
男	8	38.0	1	4.8	1	4.8	0	0	2	9.5	12	57.1
女	6	28.5	1	4.8	1	4.8	1	4.8	0	0	9	42.8
計	14	66.7	2	9.5	2	9.5	1	4.8	2	9.5	21	100

この表から、授業が一斉指導(66%)によって行われることが、多くの教師によって体育嫌いの要因であると考えられていることが分かる。

このことは、そうしている教師自身の反省の上に乗った指摘であるのか、現実にはそのような指導形態しかとれない状況にあることによるのかは明らかではない。

学習目標・内容の要因については、体力(35%)や技能(34%)を強調することが、生徒の体育嫌いの要因として考えられているようである。また、少ないが楽しさを強調することが体育嫌いの要因とみている教師もいる。

これをどのように解釈(あるいは判断)してよいのかについては、決定的なことはいえないが、これらの目標や内容に関して、教師の説明(生徒の十分な理解)が行き届いていないことを反映しているのではないかと思われる。

評価の基準としては、絶対評価をすること(42%)や、相対評価をすること(43%)が体育嫌いの要因とみている教師がかなりの数いた。

これら2の評価方法に対して、生徒がどのように反応しているか、また、それらがどんな意味において体育嫌いの要因とみられているかはここでは明らかではない。

以上から、教師は授業に関わる要因のすべての側面に対して、それぞれ原因と思われる項目を指摘しているが、これらの内容として具体的に、協調・規律の強要、個別的に種目が嫌い、施設の不十分さ、一斉指導形態、体力・技能の強調、評価の仕方等がみられた。

5) 「嫌い」に対する対応の仕方

以上に指摘されたような「嫌い」の要因について、教師たちはどのように対応しようとしているのであろうか。対応の仕方について7つの選択肢を設け、3つまで回答を求めた。

「嫌い」に対する対応では、集団の中で自信を持たせるようにする (21%)、技能向上のヒントを与える (18%)、運動遂行の過程や結果において励ましをする (16%)、肯定的に賞賛する (16%)、そして必要性やねらいを説明する (15%)、という対応がとられているとみられる。

しかし、これらが実際に予測される運動嫌いや体育嫌い、それらの諸要因に対して、どの程度有効に働いているかは、本調査においては不明である。とはいうものの、特に授業に関わる教師の要因 (原因) の指摘からして、もしかすると、効果的に成果をあげていない面もあるのではないと考えられる。

(2) 生徒の状況と認識

1) 対象の特性

生徒の学年と性別の割合は、1年生 (52%)、3年生 (47%) と1年生がやや多かった。性別に関しては、男子 (45%)、女子 (55%) と女子が全体の半数強を占めていた。生徒の部活動所属については、運動部に所属している生徒は全体の76%であった。ただし、3年生に関しては調査時点で部活動を引退していたが、それまでに、所属していた部活動を記入してもらった。これらの対象については、学年と性別については平均的な分布をしているが、運動部所属、非所属については一方的な分布であるので、この論文においては、全体を一括して集計し、検討することとした。

2) 運動と体育の好き・嫌いの状況

① 運動の好き・嫌いとその理由

運動に対する好き・嫌いについては以下の通りである。

表5. 運動の好き・嫌い

	好き		どちらでもない		嫌い		計	
	N	%	N	%	N	%	N	%
男	114	42.5	19	7	14	5.2	121	45.1
女	101	37.6	13	4.8	7	2.6	147	54.8
計	216	80.3	32	11.9	20	7.4	268	100

この表より、運動を好きと答えた生徒は全体の80%であった。また、嫌いと否定的な回答をしている生徒は8%であった。これを数字にしてみると、全体で22名程度であり、1クラスを40人とすると、3名程度いることになる。

好きの理由としては「体を動かすことが楽しい」、「自分のペースでできる」、「よく眠れる」などがあつた。ここからは、自分の体を健康に保てるからと受け止められた。嫌いの理由としては「運動が苦手」、「体を動かすことが面倒」、「疲れる」などの意見があつた。

② 体育の好き・嫌いとその理由

体育授業の好き・嫌いについては以下の通りである。体育が好きだと答えた生徒は71%で、また、嫌いと否定的な回答をした生徒は12%であった。これは全体では32名位で、1クラス40人とすると、1クラスあたり5名程度いることになる。

表6. 体育の好き・嫌い

	好き		どちらでもない		嫌い		無回答		計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
男	87	32.4	22	8.2	12	4.4	0	0	121	45.1
女	103	38.4	21	7.8	21	7.8	2	0.7	147	54.8
計	190	71.0	43	16.0	33	12.3	2	0.7	268	100

これら2つの数値は、それ自体としてはそれぞれ10%前後であるが、その教育的意味あいからすれば、問題とするに値すると考えることができよう。

3) 選択制授業に対する反応

選択制の授業について生徒は、選択制の授業はあつたほうがよいという回答が全体の66%であった。無記入が15%いたのは、回答した生徒のうち、1年生はまだ選択授業の経験がなく、よくわからなかったからであろう。この数値からして、全体の3分の2は、自由に好きな運動種目を楽しみたいという気持ちが現れているとみることができよう。

4) 運動種目の好き・嫌いとその理由

この質問項目に関しては1.非常に嫌い、2.やや嫌い、3.どちらでもない、4.まあ好き、5.非常に好きの5つから選択させた。また、それに併せて理由を自由に記述させた。

① 体づくり運動

体づくり運動に関しては、非常に嫌い (10%)・やや嫌い (19%) と否定的に答えている生徒は全体の29%であった。嫌いの理由としては、「つまらない」「地味」「体がかたい」などであった。

② 器械運動

器械運動に関しては、やや嫌い・嫌いと答えた生徒はあわせて22%であった。まあ好き・好きと答えた生徒は30%であった。嫌いの理由としては、「おもしろくない」「けがしそう」などがあげられていた。

器械運動のなかにもいくつかの運動様式があるが、これらについては、全体として問うている。「けがをしそうだから」というのはうなずけるが、ここでも、「おもしろくない」とする理由があげられているのは注目すべきであろう。

③ 陸上競技

陸上競技に関しては、非常に嫌い・やや嫌いと答えた生徒は29%であった。後者の理由は、「おもしろくない」、「走ることがきらい」、「長距離が嫌い」、「走る前の緊張が嫌だ」などがあつた。ここでもおもしろくないという理由が出されている。

④ 水泳

水泳については、否定的な回答は31%であり、その理由は「技術の取得困難」、「過去の経験」、「水着が嫌だ」、「着替えるのが面倒」、「泳げない」、というものであつた。

⑤ 球技

球技については、少人数ではあるが否定的な回答(8.5%)があるが、その理由として、「動けない」、「ルールが分からない」と「不安」、「苦手」ということが記されていた。

⑥ 武道

武道については、否定的にみているものは予測に反して15%と比較的少なかった。この理由については十分に理解できる記述はなかった。

⑦ ダンス

ダンスについては、否定的に答えたものが27%あつた。こらはまだダンス授業の経験がないためであろうと思われる。この否定的な理由としては、「気持ち悪い」、「恥ずかしい」、「細かい動きができない」、「おもしろくない」ということがあげられていた。

このように、運動種目の特性によって、否定的な態度を示すものがみられるが、それらの理由には種目特有なものもあるが、おもしろくない等という理由があることは注目すべきことであり、考慮に値すると考えられる。

4) 運動の必要性

運動の必要性については次の通りである。

運動することは非常に必要であると答えた生徒は全体の55%であり、また、ある程度必要であると答えた生徒は42%で、運動することは必要だと思っている生徒は全体の97%に達した。

このような認識(意識)が、真実彼らの状況を示すのであれば、この認識の内容を充実させることによって、体育の将来に向けての理念的な基礎を培うことができる

と考えられよう。

表7. 運動の必要性

	非常に必要		ある程度必要		それほど必要ではない		全く必要ではない		計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
男	69	25.7	44	16.4	3	1.1	5	1.8	121	45.1
女	78	29.1	68	25.3	0	0	1	0.3	147	54.8
計	147	54.6	113	42.0	3	1.1	6	2.2	268	100

この理由は問うてはいないが、中学生におけるこの認識の根拠(理由)を知ることは、意味があるかもしれない。

5) 体育の重要性

体育の重要性については次の表の通りである。

表8. 体育の重要性

	思う		思わない		分からない		無回答		計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
男	81	30.2	7	2.6	30	11.1	3	1.1	121	45.1
女	106	39.5	6	2.2	35	13.0	0	0	147	54.8
計	187	69.7	13	4.8	65	24.2	3	1.1	268	100

生徒達の体育授業に対する重要性意識に関しては、重要だと思うと答えた生徒が全体の70%であった。しかし、分からないと答えた生徒は全体の24%あつた。

この認識は、運動そのものの必要性の意識とは少しずれがあるように見える。質問形式が違うとはいえ、肯定的なものが、3分の2強程度であり、分からないとするものが4分の1程度あることは注目すべきことであるように思われる。

(3) 教師と生徒の相互比較

1) 発生頻度の比較・検討

① 1クラス当たりの運動嫌いの生徒の数については、教師は3~5名(39%)、1~2名(29%)、6~9名(23%)と分散した形で推定していたが、生徒の調査から計算してみると、3名程度であつた。教師のそれぞれの経験から、推定として回答された数字であるとはいえ3~5名が妥当であるかもしれない。

② 1クラス当たりの体育授業嫌いの生徒の数については、教師は半数強が1~2名とし、30%近くが3~5名であるとしている。生徒の方は5名程度であつた。

これらを見ると、教師は生徒の運動嫌いを多い目にみているが、体育嫌いは生徒より少なめにみているようで

あった。これがどのような意味をもつのかは不明である。

③ これに関連して教師は運動・体育嫌いがどのような様相で現れていると判断しているのであろうか。教師の回答を整理してみたところでは、運動の仕方が消極的である(25%)ことから運動嫌いとも、また、意図して見学する(24%)や、意図して欠席する(11%)ことから、生徒を体育嫌いとしてみているように思われる。

また、生徒における個別な運動が嫌いな理由の記述からみると、体を動かすことが面倒、苦手、好きではない、種目によることなどがあげられていた。この調査では嫌いな生徒における実際の態度や行動を問うていないので、比較は困難である。

2) 嫌いの要因の比較・検討

① 教師がみる生徒本人の要因としては、性格的には失敗恐怖(30.6%)と劣等意識(27.4%)、健康的には肥満(57.5%)、体力的には持久力と筋力不足(ともに30.2%)、技能的には不器用(54.3%)と個別の運動能力不足(37.1%)、価値的には苦痛と感ずること(32.5%)、体験的には不快体験(62.2%)と外傷体験(32.4%)があげられている。これらに対して生徒の場合は、運動種目の嫌いの理由から整理してみると、身体的、技能的要因(動けない)、価値的要因(おもしろくない)、性格的要因(恥ずかしい)や過去の体験があるようにみえた。

② 授業の要因として、教師は協調性や規律性の強調、技能の困難、一斉指導、体力・技能の強調、評価のあり方をあげているが、生徒も、自由にできないこと、種目によること、苦手、評価があること、などをあげていた。生徒においても同様の視点からの理由がみられたといつてよい。

3) 教師の対応と生徒の意識の比較・対応

運動の必要性については、生徒の大部分(97%)はそれを認めているが、体育の必要性については、3分の2強であった。このような認識の状況に対して、教師たちの15%が運動・体育嫌いへの対応の視点から、体育の必要性やねらい等について説明するとしている。すでに生徒たちの多くがそれらの必要性や重要性を認識しているとすれば、それを如何に徹底・充実させるかということが考えられるべき問題となるであろう。

(4) 学習カードの活用について

1) 学習カードの意味

今日、生涯体育・スポーツを目指す新しい体育の授業においては、学習者自らが学習の見通しをもち、自発的・自主的に活動することの重要性から、その手がかりとなる学習教材・資料は物的学習環境条件として重視されるようになってきている。

本調査では、体育教師における学習カードの利用につ

いて、教師の回答は少なかった。

2) 活用の有効性

筆者は、体育における生徒の学習と教師の支援を促すために、体育ノートまたは学習カードの活用が有効だと考える。現在の学校体育の学習指導は、教師がすべてを教える「教師主導型」ではなく、生徒自身が自ら学ぼうとする「生徒主導型」に変わりつつある。

新学習指導要領の改訂の要点のなかでは、「自己の課題やチームの課題の解決を目指して練習の仕方や試合の仕方を考えたり工夫したりすることができるようにする」(14)と掲げているが、生徒たち自身が自ら課題をみつけたり、課題を解決したりできるようになるためには教師側がその手がかりとなるものを提供してあげることが大切なことである。それが、「学習資料」であったり、「学習カード」なのだと考える。

授業中になかなか個別指導ができない時には学習カードを活用して指導をし、生徒との信頼関係をつくっていくことが重要なのではないだろうか。

V. 結論

この調査研究から、次のことを結論として述べる事ができると考える。

(1) 生徒の実態から、運動嫌いとは体育嫌いとは、1クラスあたりそれぞれ3名程度と5名程度いるとみられた。しかしそれぞれに対する教師の推定値が逆であることの原因は判断できなかった。

(2) 運動・体育嫌いの要因が、本人の性格的、健康・体力的、技能的、価値的、体験的側面にあり、また体育授業における規律の強調、種目の特性、一斉指導形態、体力・技能の強調、評価にあることが生徒の理由であると、教師の判断から指摘できた。

(3) これらの諸要因における教師の対応は、生徒に自信を持たせ、学習上の助言をし、励ましや賞賛を与え、また体育の必要性やねらいを説明することなどであったが、これらが運動種目において、また授業の重要性の認識において、十分に効果をあげているかは明らかではなかった。

(4) 生徒の大多数が運動の必要性を認め、また3分の2が授業の重要性を認めていることは、1つの手掛りとして意味がある。

(5) 「体育カード」の利用・普及は十分ではないが、運動・体育嫌いの個別的な指導において有効であろう。

Ⅶ. 引用・参考文献

- 1) 浅田隆夫 (1980):「運動嫌いを形成するもの一学習の
つまずきとの関連の中で」 体育科教育
- 2) 荒木豊 (1992):「明日にむかう体育」 大修館書店
p.38
- 3) 江島紘 (1993):一人ひとりが満足する授業をめざし
て学校体育 46号
- 4) 波多野ほか (1981):「運動ぎらい」の生成機序に関
する事例研究、体育科学研究第26号巻第3号
- 5) 羽根田卓 (2000):運動嫌い再考、体育哲学専門分科
会夏季合宿研究会資料
- 6) 長谷川悦示 (2002):「体育嫌いを生まないための教師
の心得と方策」、体育科教育 50巻1号
- 7) 浜田靖一 (1980):「体育・スポーツ嫌い」を考える
新体育
- 8) 特集 (2001)「いま、学校体育はこう変わる」学校体
育、第54巻第4号
- 9) 伊藤精男、波多野義郎 (1982):「体育授業ぎらい」
の生起に関する因果推論の試み 日本体育学会 体
育学研究 第27巻第3号
- 10) 石河利寛ほか (1981):「子どもの発達と体育指導」、
大修館書店
- 11) 厚生省 (2005):平成16年度世論調査
- 12) 中村和彦 (2002):「子どものライフスタイルから見
えるもの」、体育科教育、50巻1号
- 13) 文部省 (1998):中学校学習指導要領解説 保健体育編
- 14) 岡澤祥明 (2002):体育授業の心理学 大修館書 p85
- 15) 宇土正彦 (2003):新訂 体育科教育法講義 大修館書
店
- 16) 佐々木万丈 (2003):体育授業に対する適応、中学生
の場合体育学研究 48号
- 17) 佐々木万丈 (1995):体育授業における生徒の心理的
ストレスの分析 日本体育学会宮城県支部
- 18) 佐々木万丈 (1994):「体育授業における生徒の心理的
ストレスの分析」日本体育学会 (宮城県支部)
- 19) 佐々木万丈 (2001):中学生用体育学習ストレスコー
ピング尺度 (SCS-PE) の開発と標準化 教育
心理学研究 49号
- 20) 佐々木万丈 (1982):「体育授業ぎらい」の生起に関
する因果推論の試み 体育学研究 第27巻3号
- 21) 佐伯俊雄 (1982):「体育学習でつまずくところ」、
体育科教育 30巻13号
- 22) 鈴木敏夫ほか (1973):体育ぎらいの児童生徒の体育
指導現代学校体育大事典 大修館書店
- 23) 関岡康夫 (2004):コーチと教師のためのスポーツ論
道と書院 p.136
- 24) 杉原隆・豊田一成ほか (1976):日本体育学会 第27
回 大会資料 pp81-83
- 25) 滝沢かほる (2002):こうすれば「体育嫌い」は変わ
る体育科教育
- 26) 是枝喜代治 (2002):「運動が子どもの発育発達に及ぼ
す影響」、体育科教育 50巻1号
- 27) 日景奈美・福岡雄二ほか (2004):体育・保健体育科
研究会議 主体的な学習活動を促す体育・保健体育
科の授業改善、川崎市総合教育センター研究紀要、
平成16年度第18号